

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第17号

目次

京大の歴史に関する図録の英訳に携わって、感じた言葉と文化のギャップ マイケル・ジャメンツ…………… 2	大学文書館の動き： 法人文書の一部を廃棄しました …………… 9
『吉田寮関係資料』の公開 河西 秀哉 …………… 5	お知らせ： 百周年時計台記念館歴史展示室内 「企画展示室」のご利用案内 …………… 9
写真の公開を始めました 西山 伸 …………… 6	敗戦直後の学生と食糧状況 一ララ救援物資— 河西 秀哉 …………… 10
日誌…………… 8	



吉田寮入口の銀杏並木（1950年ごろ）

吉田寮は1913（大正2）年2月に完成。全室個室を採用するなど、当時の学生寄宿舍としては全国随一の設備を誇った（関連記事5ページ）。現在使用されている国立大学の学生寮の中で、最も古い建築物である。

京大の歴史に関する図録の英訳に携わって、 感じた言葉と文化のギャップ

京都大学文学部非常勤講師 マイケル・ジャメンツ

編集部より

『京都大学大学文書館だより』第16号でお知らせしましたように、大学文書館では、常設展「京都大学の歴史」図録の英文版を刊行しました。翻訳をお願いしました文学部講師で翻訳家のマイケル・ジャメンツさんは、元来日本文学をご専門にしておられますので、高等教育制度や戦前の史料などにはご苦労されたのではないかと思います。同時に、本図録の翻訳にあたって改めてお感じになったことも多かったのではないかと思いますので、日米の言葉・文化のギャップについてご執筆を依頼しましたところ、ご快諾いただきました。以下に、ジャメンツさんご執筆の文章を掲載します。

私は歴史に関する学問的論文の英訳を行っているほか、昔ハーバード大学で行っていたように京都の数校の私立大学で日本史の授業を担当することがありますが、歴史家というわけではありません。ただ歴史学は興味深く、翻訳することで、私にとって歴史の新事実という新しい知見が得られます。京都大学大学文書館の『常設展－京都大学の歴史』の翻訳を行う以前は、京都大学の歴史に関する知識は浅く（京大となんらかの関係を持つようになってから15年がたっても）、私にとっては、なんとなくミステリーに思っていた大学について学ぶ機会に恵まれました。

どんな近代的な大きい組織でも、なかなか把握しにくいところがあります。京都大学も、かなり複雑な組織であり、更に歴史が比較的長い大学なので同様です。1960年代でさえ私の出身校カリフォルニア州立大学の総長が、universityではなくmultiversityだと主張しました。当時は自分の出身校にもかかわらず、大学の組織や運営を理解できませんでした。しかし、考えてみると、後に自分が履修し、卒業し、または教鞭を執ったいくつかの大学の組織や歴史をちゃんと知っていたということはありません。京都大学を知り尽く

すのは誰にとっても無理かもしれませんが、大型客船の船長のように総長はその方向を確かなものにして大学を導けばいいのではないのでしょうか（個々の教室の内情を知らなくても）。

船長は、captainが、だいたいにおいてびつたりの英訳でしょうが、学長になると、そうは簡単にゆかないと思います。学長や総長などは、presidentとする向きがあります。当初の理工科大学の学長や京都帝国大学の総長、現在の京都大学の総長は、同じ訳語でいいかとの問題を別にして、大学を代表する人をpresidentの外にrectorかvice-chancellorあるいはprovostと訳する可能性があります。京都大学の場合では、決まり訳のpresidentよりも、いくつかのキャンパスを運営するchancellorが適切な気がしましたが、訳にも換えられない歴史があります。

日本の大学の基本用語のなかの基本である研究室ですら、英語になりにくい言葉です。なぜならば、アメリカの大学には、研究室に相当する組織は存在しないからです。文字通りの訳のresearch officeかstudy roomあるいはlaboratoryは、合っている場合がありますが、大方の読者が首を傾げるように、か

これらの頭のなかの混乱を招きます。

研究室をローマ字の“kenkyushitsu”のままにする方法があります。このように、英訳しないほうがいい言葉もあると思います。私が好きな例として、たとえば、小津安二郎監督の『お茶漬の味』の題名の英訳を“Flavor of Green Tea over Rice”にしたのは、言葉の意味そのものに忠実でありながら、映画がつたえようとしていることに反していて、通訳の第一の原則を裏切っています。お茶漬けを ochazuke にしたほうがいいかもしれません。訳さない方がいい例は、ほかにもあります。私の子供時代のアメリカには、日本と日本人に対して悪意に満ちている雰囲気はまだ少し残っていました。日本語の「お金」や「ご飯」のような丁寧語は honorable this や honorable that のように英訳するのは、珍しくはありませんでした。このような訳は、日本民族が二面性のある偽善的なものばかりで、表面的には丁寧でも、心は鬼のように残酷であるという印象を裏付けることになりました。同級生の一人は、money とか toilet とかに対して深い尊重を払う民族は全く信用に値しないと判断しました。お手洗いの「お」は翻訳しないほうがいいに違いありません。

お茶漬けのように他の社会や言語に存在しない事柄や言葉や概念を翻訳するには無理があるという事は誰にでもわかると思います。まして、文法中心の日本語の「てにをは」を英語に、または、英語の不特定冠詞を日本語に訳すのはナンセンスです。私が気になっている翻訳の問題のひとつは、アメリカの男性がよく使う暴力的、性的な表現です。日本語訳にするとどうなるかと心配しています。アメリカの小説、映画、音楽、とくにヒップホップを忠実に日本語訳にすると、大変なことになると思います。しかし、見るかぎり、日本人の翻訳家は、性行為を表す動詞の活用語を、セリフごとに入れ込むのをやめたようです。新しい日本語の語彙を発明するまでは、米語のラフな four-letter words は日本語になりません。ところが、このような sanitized（無害

にされた）セリフは、アメリカ文化の本当の姿やアメリカ人の実の心理（表面は粗末、行動は暴力的だが、心は優しく、正義を愛している）をつたえているかどうかが問題になります。

現代の大学は、西洋にルーツがあり、昔の東アジアの大学の影は薄いという否めない事実を歓迎しない人々が洋の東西を問わずいます。最近インターネット上の仏教学に関する投稿に大物のアメリカ人学者の悩みが載っていました。彼曰く「何故我々仏教を研究している者が、論文を書く時には、仏教哲学者ナーガールジュナよりも欧米の学者に頼り」、さらに彼はフランスのフーコーへの崇拝を歎き、「どうしてアジアの学者でさえ、古い経典を引用しても、論の組み立てには、西洋の理論を採用するのか」という不満を漏らしました。善かれ悪しかれ、フーコーがもてはやされている時代です。

英語の faculties, deans, departments, institutesなどは、京大という組織の官僚的骨格になります。その組織図をみると、どうしても私が研究している平安時代の律令国家の仕組みの図が浮かんできます。同じ規模のアメリカの大学では、京大より事務員の数が多いか少ないか、組織がもっと複雑かどうか、興味深い問題です。測りにくい問題でもあります。一般的に言えば、日本の組織と同じようなアメリカの組織を比較してみると、日本のほうが官僚化しているようにみえます。あまりいい例ではないかもしれませんが、研修員として初めて京大に来た15年前、オウム真理教の地下鉄サリン事件がおこりました。アメリカ国民は同じぐらい冷酷な殺害を実行する可能性があるかと確信していますが、同等の組織力を駆使できるかは疑問です。

翻訳することにより、京大について多くを学ぶことができました。京大のキャンパスを初めてみたのは、1970年代の前半で、旅行者としてきた時でした。無知、未熟な私は、京大がどれほど反乱期の渦中にあったかということに気がつきませんでした。アメリカの

学生運動にもちょっとだけ参加した私は今回翻訳することにより、京都大学の皆さんのご苦勞が認識できました。1970年代以前の京大は、私にとって空白地帯でした。なんとなく京都学派とか学問の自由の伝統を耳にしたことはありましたが、その歴史的背景やその伝統の深さは知りませんでした。

個人の好みの問題でしようが、戦前の学問の自由を守る運動および大学の進化と、戦争直前・戦争中の時期とを比べると、後者の方が大変興味深く感じられます。その理由はわかりません。あの時代について妙に惹かれるのは、虚偽のノスタルジアといえるでしょうか。生きていたわけではない時代に魅力を感じることは、珍しくもないでしょうが、たぶん歴史家になる人の動機になると思われまます。当時の古い歌を聴くたびに懐かしく恋しくなります。輪廻の証拠と思う人もいるかもしれませんが、そうとは思えません。同じ時代のアメリカのジャズやカントリー音楽にも惹かれるからです。もしかすると、両親が経験した時代が文化遺産として自分の心の底に響いているのかもしれない。日本の学徒出陣と私の叔父の南太平洋での戦死は、無関係ではないと思いますが、日本に長くいると、前者の悲劇が身近に感じられようになりました。

修正論者は、1950年代や1960年代前半を肯定的に再評価していますが、その魅力が感じられません。いつの日か後悔するようになるかもしれませんが、画一的な鉄骨コンクリート打ち放し仕上げの校舎のビル群が、徐々にリフォームされていることに今は喜びを禁じえません。

動乱の1960年代後半や1970年代は、当時を体験した日本人やアメリカ人を傷つけたことになりました。ケント州立大学事件^(※)とその死者たちを除いて、学生運動のつけは、アメリカの大学よりは、京大のような日本の大学と社会にずっと重くまわった感じがします。団塊世代の我らの青年時代でもあり、傷ついても、本物のノスタルジアを感じずには

居られません。

1980年代や1990年代前半の京大は、私にとっては、空白です。総合人間学部設置以外、京都大学にとっても、この時期は目を引くような展開がないように感じます。15年前から、京大は転換期に入ってきたようです。目にした変化も多いのですが、プラスになるものが大部分になると期待します。一昔前、大学が学内で自家製ビールを販売することになる日がくると考えた人がいるでしょうか。こういうチェンジに反対する人もいるはずですが、おそらく一番大きい声は、「味をよく、値段を下げろ」と叫んでいる人たちでしょう。そんな時代に入っているような気がします。すこし真面目に考えると、最近におこっている変化の中では望ましくないものもあるように思います。あまりにも早く変化するものに対しては、判断しにくくなるので、未来の歴史家の判断に任せた方がいいと思います。

京都大学の歴史を英訳することによって、学んだことのひとつは、京大の強みはその人材にありと、そしてそれが維持存続できるかぎり京大の将来像は明るいということです。百年先、京都大学の歴史が翻訳される時、最初の百年間と同じ位の面白さと勇気付ける力のある話になる事を祈るばかりです。

(※) ケント州立大学事件…1970年5月4日、オハイオ州ケント州立大学においてベトナム戦争反対の集会を行っていた学生たちに、州兵が発砲、4人が死亡、9人が負傷した事件。

『吉田寮関係資料』の公開

京都大学大学文書館助教 河西 秀哉

2008年に公開された映画「鴨川ホルモー」(原作の万城目学氏は京都大学法学部出身)の中で、主人公安倍の友人である高村は「百万遍寮」に住んでいる。ちなみにこれは原作とは異なり、映画だけの設定である。この「百万遍寮」のモデルであり、実際にロケ地として使われて映画のワンシーンに映し出されていたのが、今回資料を公開することとなった吉田寮だ。わざわざ原作から設定が変更されること自体、吉田寮が世間からは京大の象徴的な建物の一つとして認識されていると言えるのかもしれない。

さて『吉田寮関係資料』は、2008年1月17日に吉田寮自治会より大学文書館へ寄贈された。これを受け大学文書館では、資料の長期保存・公開のためのプロジェクト「1900年代から1950年代の京都大学における寄宿舎に関する基礎的調査・研究－『吉田寮関係資料』を中心に－」を立ち上げたところ、2008年度の総長裁量経費に採択された。以降資料の整理を進め、目録を作成し、2009年7月15日より公開を始めた。資料の総計は1263点。うち、個人情報関係で2009年度現在87冊は閲覧対象としていない。資料の作成年代は1900年から2000年までの約100年間と幅広い。

京都帝国大学の寄宿舎は、第1回入学宣誓式直後の1897年9月に開設された。当初は現在の附属図書館付近にあった旧三高事務所が仮の寄宿舎として利用され、1898年8月に現在の本部構内にあった三高寄宿舎を譲り受け、京都帝国大学の寄宿舎とした。現在の吉田寮は1913年2月に移転建て替えされたものである。つまり、今回公開する『吉田寮関係資料』は、建て替え前の寄宿舎の資料も含まれていることになる。初期の寄宿舎は初

代総長の木下広次の思想を反映し、自律的な生活を目指したと言われる。それゆえ『吉田寮関係資料』は、京大の「自由」のイメージを検討するのにも重要な資料群と考えられる。

一方で、かなり近年の資料までであることも研究史上、重要である。1969年の紛争期、その後の寮の管理運営や新築に伴う「学寮問題」(詳しくは『京都大学百年史総説編』などを参照)における寮自治会・寮内学生の方針や行動が詳細に記された資料も『吉田寮関係資料』に所収されており、今回初めて公開することとなった。戦後の京大における学生の動向や学生運動史の観点からも重要な資料群と思われる。

なお目録は、大学文書館ホームページ(<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>)より、「所蔵資料検索システム」に入って検索することが可能である。目録冊子は、大学文書館閲覧室、各大学図書館での閲覧のほか、京都大学学術情報リポジトリの中の「京都大学大学文書館」のコミュニティ(<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/68810>)においてpdfファイルで公開している。

写真の公開を始めました

京都大学大学文書館准教授 西山 伸

大学文書館は、京都大学や第三高等学校の歴史に関する写真を約 14 万点所蔵しています。その内容は、創立期から近年までのキャンパス・建築物、人物、行事、事件など多岐にわたっています。どの写真も、歴史上のある瞬間を切り取ってわれわれに示してくれるもので、文書資料にはない具体性と迫力をもっていると言えましょう。マスコミ関係や、出版社などからの利用依頼も少なくありません。

所蔵写真の一部は、以前百年史編集委員会が編集した『京都大学百年史 写真集』（1997 年）に収録していますが、収録点数は約 800 点にすぎず、同書刊行後に寄贈された写真も数多く、所蔵写真の公開はかねてから大学文書館の課題になっていました。

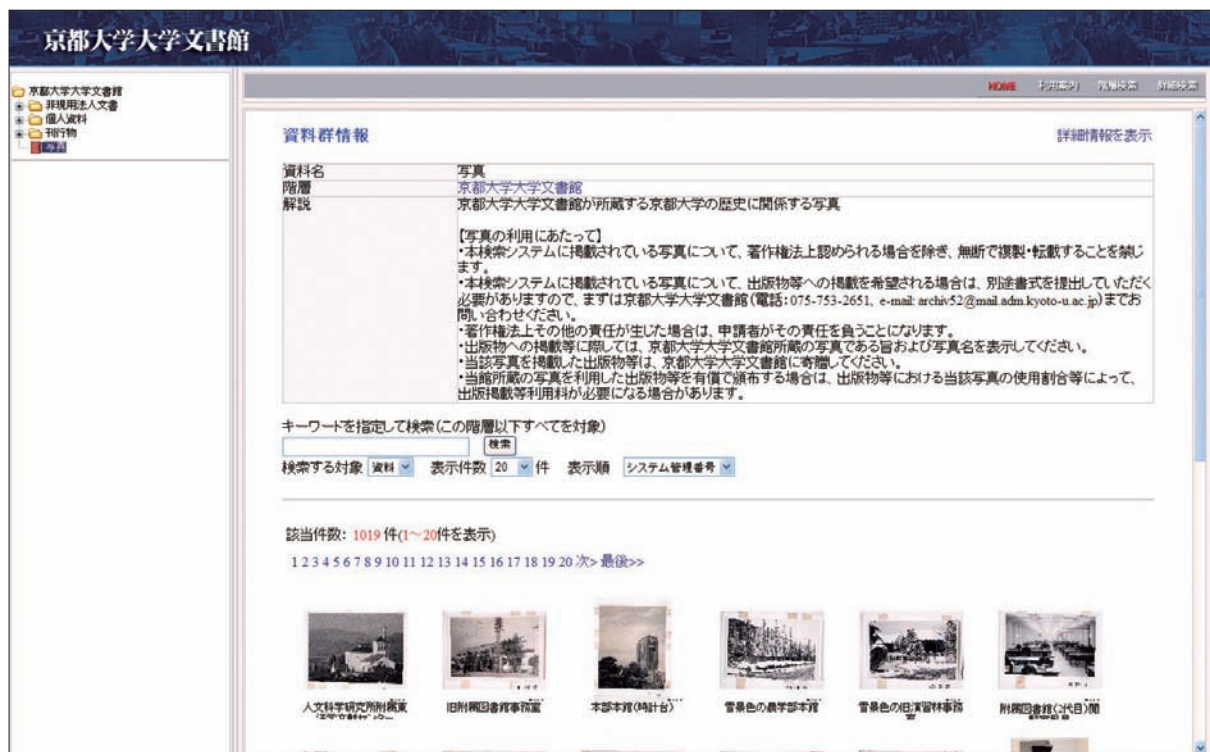
そのようななか、大学文書館では、すでにご紹介しましたように（『京都大学大学文書館だより』第 15 号、2008 年 10 月）昨年度所蔵資料検索システムの運用を開始しましたので、このシステムに載せる形で写真をウェブ上で公開するための準備を進めることとしました。その結果、2009 年 6 月 22 日から、当面の整理が終了した 1019 点の写真を同システムを通じて公開することができました。

今回は整理の都合上、キャンパス・建築物の写真のみの公開となりましたが、今後様々な人物、行事、事件などに関する写真も公開していく予定です。ぜひ、これらの写真をご覧いただき、かつての京大の姿を目でご確認いただくとともに、教育・研究等にもご活用いただくことを願っております。

写真の閲覧には、京都大学大学文書館所蔵資料検索システム（<http://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/bunshokan/index.html>）から入って、「資料検索」さらに「写真」をクリックしてください。右頁の [図 1] が出てきます。個々の写真をクリックすると、関係する情報が表示されます [図 2]。さらに写真をクリックすると拡大されて表示されます。作成（撮影）年月日、キーワードによる検索も可能です。詳しい利用方法につきましては、「所属資料検索システムの使い方（写真編）」（<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/puse.pdf>）をご覧ください。

（なお、写真の出版物等への利用については、必ず事前に当館までご連絡ください）

[図 1]



[図 2]



[日誌] (2009年4月～9月)

- 2009 / 4 / 6 西山准教授、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 4 / 7 大学文書館テーマ展「時計台の昔と今」開催（～8月2日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。
- 4 / 13 大学文書館教員会議。
- 4 / 13 総務省より、公文書等の管理に関する法律案についての懇談および大学文書館の視察のため来館。
- 4 / 22 産経新聞社、時計台および京都大学の歴史について取材。
- 4 / 24 天理大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。
- 4 / 30 『京都大学大学文書館だより』第16号発行。
- 5 / 25 大学文書館教員会議。
- 5 / 28 西山、全国大学史資料協議会東日本部会2009年度総会において、「東日本部会の活動の歩みと現状」と題して講演。
- 5 / 29 天理大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。
- 6 / 2 学外より、創立期の採鉱冶金学科について照会。
- 6 / 3 学外より、元京都帝国大学法科大学教授・巖谷孫蔵の履歴に関する照会。
- 6 / 20 京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。
- 6 / 22 大学文書館所蔵写真資料の公開開始。
- 7 / 2 西山、図書館機構講演会において、「京都大学における大学文書館の仕事と役割」と題して講演。
- 7 / 6 大学文書館教員会議。
- 7 / 10 京都新聞社、学徒出陣について取材。
- 7 / 13 立命館大学より、文書管理の状況について視察のため来館。
- 7 / 15 『吉田寮関係資料』の公開開始。
- 7 / 15 経済学研究科より、石川興二関係資料寄贈。
- 7 / 22 学内より、元京都帝国大学工科大学教授・武田五一の資料に関する照会。
- 7 / 28 西山、佐竹昭広関係資料調査のため東京出張。
- 7 / 30 大学文書館教員会議。
- 8 / 4 第14回国際サンスクリット学会企画展「慈雲－原点を求める心－」開催（～9月6日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。
- 8 / 6 オープンキャンパス2009開催（～7日）。
- 8 / 7 天野光三氏より、第三高等学校関係資料ならびに「全臨闘」関係資料寄贈。
- 8 / 7 九州大学より、百年史編纂の経緯調査のため来館。
- 8 / 17 西山、中国・昆明理工大学学生に京都大学の歴史について講義。
- 8 / 19 事務補佐員豊田敦子雇用。
- 8 / 25 事務本部各部署および各部署の文書管理担当者を対象に、法人文書ファイル移管に関する説明会を開催（於・楽友会館）。
- 8 / 27 大学文書館教員会議。
- 8 / 30 河西助教、「旧制高等学校夏期セミナー」に参加、「戦後初期、京都大学の学生と学生運動」と題して報告（～31日。於・松本旧制高等学校記念館）。
- 8 / 31 京都橘大学よりインターンシップとして学生を受け入れ（～9月11日）。
- 9 / 1 学外より、元京都大学農学部教授・近藤金助の履歴に関する照会。
- 9 / 2 『京大天皇事件関係資料』の公開開始。
- 9 / 3 西山、地域科学研究会セミナー「大学アーカイブズと自校教育の展開」において、「京都大学における「自校史教育」－何を、何のために－」と題して講演。
- 9 / 8 大学文書館企画展「京大の1969年－大学文書館所蔵資料で見る－」開催（～11月1日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。
- 9 / 8 大学文書館運営協議会。
- 9 / 8 京都新聞社、企画展について取材。
- 9 / 8 読売新聞社、企画展について取材。
- 9 / 16 川島巨氏より、大学紛争関係資料寄贈。
- 9 / 24 西山、全学教育シンポジウム「学士課程教育を再考する－第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて－」に出席（～25日。於・京都大学百周年時計台記念館）。
- 9 / 28 大学文書館教員会議。

大学文書館の動き

法人文書の一部を廃棄しました

2009年9月14日から18日および25日に、大学文書館では所蔵する非現用法人文書の一部の廃棄を行いました。法人文書の廃棄は、2004年度より開始しており、今回で6回目となります。また、これまでは各部局から搬入された非現用法人文書のみを対象としていましたが、楽友会館書庫のスペースも狭隘となってきたため、事務本部から搬入された非現用法人文書も廃棄の対象としました。

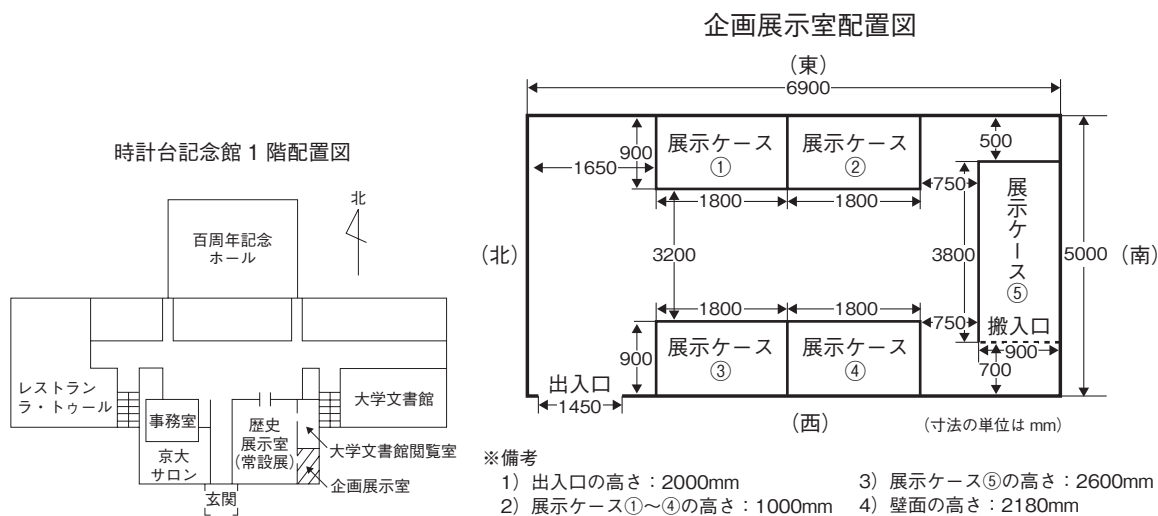
廃棄対象とする文書の内訳は、物品の購入記録や研究教育に関連する支出などの記録、教職員の福利厚生関係の記録などが中心です。

各部局からの非現用法人文書は6435冊、事務本部からの非現用法人文書は2831冊、合計9266冊を廃棄しました。

今年度初めて、事務本部からの文書を廃棄対象としましたが、昨年度まで対象としてきた部局からの文書とは内容や形式が異なるものも多く、これまで大学文書館で策定してきた評価選別の基準では判断しにくいものもありました。今後、部局からの文書の評価選別の基準や経験を踏まえ、議論や実践を積み重ねながら、事務本部からの文書に即した廃棄基準も策定していきます。

百周年時計台記念館歴史展示室内 「企画展示室」のご利用案内

京都大学百周年時計台記念館1階歴史展示室内の企画展示室は、企画開催催期間中を除き、部局等が主催する各種展示にご利用いただけます。ご利用のお申し込み・お問い合わせにつきましては、大学文書館までご連絡ください。



敗戦直後の学生と食糧状況 － ララ救援物資 －

京都大学大学文書館助教 河西 秀哉

敗戦直後の日本の経済は危機的状況であった。インフレで物価は急上昇し、輸送体制もほとんど崩壊していたことから、食糧状況も大変厳しかった。日本社会全体がまさに貧困状態にあったと言ってもよいだろう。京都帝国大学に通う学生も例外ではなかった。1947年の同学会による統計調査によれば、学生が毎月使用する食費は「生活費の七割」と高い比率を占めていながら、「必要カロリーの半分もない」ほどの栄養摂取しかできず、それが学生の「結核患者続出の原因」だと分析されている（『学園新聞』1947年10月6日）。

こうした日本の状況に対し、アメリカ国内から援助の手が差しのべられた。その一つが、「ララ救援物資」である。ララ(LARA)は「アジア救援公認団体(Licensed Agencies for Relief in Asia)」の略で、アメリカ内外の宗教団体・社会慈善団体などが集まって結成され、1946年より占領軍(GHQ)を通して、日本国内に食糧や衣料、医薬品などの救援物資を送った(その活動は『厚生省五十年史 記述編』などを参照)。この時期の小学校給食における脱脂粉乳はこれにあたる。

ララ救援物資は大学にも届けられた。対象は大学寄宿舎の学生のみであり、物資は寄宿舎に一括して配給された。送られた物資は原形のままでは学生に支給されず、必ず寄宿舎において一括調理されて支給されることが条件であった。全国の国立・私立の大学や高専にララ救援物資が送られ、京都府内では京大、同志社、立命館、大谷、龍谷、京都学芸(現京都教育)、京都工芸繊維の各大学の寄宿舎に届けられている(「昭和二十四年十月起 ララ救援物資関係書類」『吉田寮関係資料』所収)。送られた物資は主にスキムミルクや小麦、乾燥卵、大豆、ほうれん草の缶詰などで、時によって種類は様々であった。吉田寮ではこれらの食糧を利用していたため、この時期

の朝食は洋食だったようである。

文部省からの通達で、ララ救援物資が届けられた寄宿舎には、感想文をララに送ることが求められた。ある学生が書いた感想文には、「戦後の窮乏に追い込まれた私達にとっては何よりも嬉しい贈物でした」ララの贈物を戴いた学生達は、

其の博愛の温い心を奥深くに感じながら、次第一へに戦争の悪夢から解放されて、平和への希望を抱く様になりました」と記されている。ララへ提出される感想文ということは差し引かなければならないだろうが、ララ救援物資は戦争からの解放を学生に意識させることには繋がるものだった。

ララ救援物資によって、吉田寮の学生の摂取カロリーは未だ不十分ながら好転した。そのため、『吉田寮関係資料』に所収された上記のグラフに見られるように、救援物資支給後の学生の体重平均は上昇している。ララ救援物資が、寮の学生のみとはいえ、大学生の食糧状況を救援したことはあまり知られていない。敗戦後の学生については、未だ様々な研究が残されていると言えるだろう。

